

김이설

金異設. 1975年忠清南道禮山出生。2006年ソウル新聞新春文芸で登壇。長編『나쁜 피』(민음사 2009)、小説集『아무도 말하지 않는 것들』(문학과 지성사 2010)がある。高校の成績がよくなくて、最初はどこかの大学の文献情報学科に通い、中退して違う大学の文芸創作科に通ったという。

「흉몽(凶夢)」 2014年度李箱文学賞優秀作品

[登場人物]

나 : 海に近いモーテル「ラブストーリー」の従業員。工場に通っていた夫が人員削減の対象となり、親戚からお金を借りてトースト店を始めたが失敗し、一人娘を実家に預けて身を隠しながら働いている。

주인집 남자 : 나が住んでいる民宿の主人。雑貨店もやっている。

아들 : その息子で나의恋人。ソウルの大学に通っていたが、家にもどって家業を手伝っている。口をきかない。

주인집 아주머니 : その母親。息子に失望して逆上した夫から毎晩DVを受けている。

사모 : 「ラブストーリー」の社長の妻。吝嗇家。

남편 : 나의夫。気が小さくて、首を切られても部屋の中で壁を向いて焼酎を飲むだけだった。いまは地方の工事現場を転々としている

1・(311-312) 나는誰かに追われている。半月前、下宿から出ようとしているとき、大家が、息子がいるだろうと言って怒鳴り込んできた。「나는 형클어진 머리를 매만졌다.」p.311 大家が夜あとをつけるようになったのは、その日からだった。

2・(312-314) 昔は漁村だったその町は最近松林を造成してから飲み屋でにぎわい、ペンションもできた。大家の息子が帰ってきたのはそのころだった。息子と関係したことに気づいた日から、黙って後をつけるだけだった大家が、この日、とうとう彼女に追いついた。だが息子のことを話さない男に나는恐怖を感じる。

3・(314-318) 部屋にもどると、大家の家で大喧嘩がはじまった。息子が帰って来てからずっとこうだ。息子と関係したのは、娘が泣きながら電話をしてきた日で、姉の夫がとうとうモーテルに現われた日のことだ。「お互いの体をまさぐるだけで十分だという一致した感情が平穏な夜をあたえてくれた」 p.316

翌朝、いつものようにモーテルに行き仕事をはじめ。昼、夫から電話が入った。

4・(318-319) 夫が工場を回顧され、両方の親戚からお金を借りてはじめたトースト店が失敗して、家族が離れて暮らすようになったいきさつ。工事現場を転々としていた夫が近くに来ているという。

5・(318-321) 209号室の掃除をはじめると財布が目に入った。中に家族写真が入っていたが、そこにいるとは違う男が現われてその財布を取って立ち去った。Nは掃除をつづける。3年前から1日も休まずにやっている仕事だ。気がつくともう12時だった。

6・(321-323) 外で待っていた夫はまるでホームレスのような姿になっていた。部屋に入っても夫はカバンを抱きしめて離そうとしない。

7・(323-325) 夫はカバンを持ったままセックスして寝てしまう。カバンの中には金が詰まっており、夫の服の汚れは血だった。Nは服を燃やす。

8・(325-326) 翌朝、夫と金のことで争ってから仕事に出かけた。出がけに会った大家は男を追い出せと嫌味を言う。

9・(326-330) モーテルに着くと、昨日の男がフロントで、財布の金がなくなっていたと文句をつけていた。社長の妻が、トラブルは困るから何とかしろと言って、給料から差し引く条件で立て替えた。

(328頁)

「ひどい目にばかりあってきたけれど、こんな風に両目を開けたまま金を奪われるのは初めてだった。もともと、何年間も毎月払いつづける利子だって金を盗まれているようなものだ。もともとそれなら、私に金を奪われた人たちは、どんなに腹立たしいことだろう。胸が石のように重く沈んだ。深呼吸をして客室に上がった。女ものの財布だったことを、そのときようやく思い出した。駐車場に飛んでいったが、無駄だった。男の車は消えていた。

これまで生きてきて、悔しいことなら山ほどあった。夫がとつぜん失職したこと、借金して出した店でまったく稼げなかったこと。一生懸命生きてきた。必死に節約したが、銀行に貯金なんか一度もできなかった。ちょっとでも金が入れば、金を借りた親戚の利子へまわした。せつせと働いたし、努力しなかったわけでもないのに、先に進めなかった。腹をすかし、自分の子供の面倒もまともに見れずに生きていたのに、同じ

場所にいた。人が汗水たらして稼いだ金を使い込んで、家族バラバラになった。自分が悪いのだから、当然罰を受けるべきだと思った。だけど、悪くないことまで自分のせいにされる世の中だった。それを自分の力でふせぎきれないのが悔しかった。悔しくて無念で、無念で空しかった。自分だけが馬鹿な生き方をしているようで、腹がたった。」

「いつだって、どうにもならないというのは限界と向き合うことだったし、望まないことをせねばならないという意味だった。どうにもならないというのは、逃げる場所がないという意味で、逃げてもだめという意味だった。」

夜、家にもどりながら、レはカバンの金のことを考える。当然親戚に返すことに使うべきだが、気が進まない。化粧品とか、美容院とか・・・夫を追い払ってあの金を一人で使ってはいけないうらうか。いや、出所もわからない金を使うなんていけない。だけど、「喉が渇いているのに、流れる水を飲まない人間なんていない」。遠くから大家の息子が自分をみまもっていた。村の入口の街灯が消えていた。

10・(330-331) 村の入り口の近くまで来たとき、レは大家に暴行されかかった。そのとき「背が高く痩せた黒い影」が大家を倒して逃げていく。

11・(331-332) 部屋にもどったレは夫とカバンを取りあい、カバンが壊れて夫は気が狂う。

12・(332-333) レは現場にもどり、大家の首に巻かれた廃網を自分に巻きつけた。何かにひっかかって血がたくさん出た。レはその網を持って大家の息子の所に行く。

13・(333-334) 数日後、大家の妻が夫の失踪を警察に届け出、その日のうちに大家の死体が発見された。翌日、レのところへ警察が来る。レは、自分を襲ったのが誰かは知らなかった、黒影が見えたので自分は逃げ出した、このことは恥ずかしくて人に言えなかったと嘘をついた。夫のカバンから凶器が発見され、夫は狂ったまま連行されていった。レはモーテルの倉庫に引っ越した。そして、ときどき大家の息子のところに行った。そのうちに首の傷は治り、痕になった。

「傷痕を見るには鏡の前に立たねばならなかった。首を最大限まわした。目がすっかり白眼になるほど横目で見つめる。裂けた目が私をにらんでいた。ぞっとした。お金の入ったカバンが目に入った。すると笑みがこぼれるのを抑えることができなかった」

[私の要約]

ナは夫のリストラを機に夫婦で商売を始めるが失敗し、親戚に借金を返すため、海岸のモーテルで1日14時間働いている。ナが息子と関係を持ったことを知った大家は、半月前からナのあとをつけるようになり、この日初めてナに追いついた。だが息子の話をしない大家にナは恐怖をいだく。

翌日、工事現場を転々としている夫が現われた。服に血がつき、金のつまったカバンを抱きしめ、ほとんど気が狂った状態だったが、何が起きたのか言わない。その翌日の夜、彼女を襲った大家を息子が殺してしまい、ナは気が狂った夫にその罪を着せて金を独り占めする。

無理に見ようとしなければ見えない所に残った首の傷跡。その傷をもちながら彼女は「平穏な」新しい日常を生きていくことだろう。誰が彼女を責められるというのか。

[金異説に関する評]

「彼女の小説は、つらく困難な経験を具体的に証拠だてる雑多なディテールに忠実であることで、その経験の内部にひそむ心配や悲しみや不安などをあざやかによみがえらせることに巧みだった過去世代の小説傾向と深い関係にある。したがって現時点において金異説が小説化する生は、意外にもかなり特異に見えるのである」 백지은 <나쁜 피> 解説

この解説のとおりだが、1つ、過去世代の小説とは大きな違いがある。彼女の小説は自然主義を思わせる正統的な手法でありながら、「社会の不条理にたいする告発」という過去世代が背負っていた障壁をのりこえてしまっていることである。